市史だより

Gačimaja がちまや

第８号・２００６年２月２８日（火）発行

年４回　（５・８・１１・２月発行）

編集・宜野湾市教育委員会文化課　市史編集係

〒９０１-２７１０　宜野湾市野嵩１-１-２

問い合わせ・情報提供先

☎　（０９８）８９３－４４３１

Fax　（０９８）８９３－４４３４

Kyoiku08@ami.city.ginowan.okinawa.jp

写真は、今年２月２２日に行われた真志喜中学校１学年の「総合学習発表会」の様子です。グループ毎にテーマを決めて、調べた内容をスクリーンに映し出したり、壁新聞や紙芝居にまとめて発表していました。テーマは羽衣伝説、タイモ、基地問題、エイサー、沖縄のお菓子など、校区内に関するテーマから沖縄県内に関するテーマなど、幅広く取り上げていました。同じく、嘉数中学校では１月３１日に１学年全員を体育館に集め、クラス代表のグループが発表していました。

小中学校では総合の時間に、地域にまつわるテーマを題材に、調べ学習を行っています。生徒さん自身でテーマを見つけ、調べ方やまとめ方、発表の仕方を身につけることがねらいです。また、テーマも身近な題材を取り上げて、地域を見直すきっかけにもなります。地域に目をむけると、歴史・文化・自然・基地問題など、いろんなことが見えてきます。これら小さな関心が、子ども達にとって将来、大きな関心に広がることでしょう。さぁ、将来の担い手は、あなた達ですよ！

宜野湾市のトゥーティークー？！

みなさんはトーティークーを知っていますか？ここでは宜野湾市のトゥーティークーについてみていきたいと思います♪

☆腰憩(クシュクィー)いと土帝君

土地の守り神である土地公（トチコウ）は、農業の神様として沖縄に伝わり、土帝君（トゥーティークー）と呼ばれています。ご神体として神像や石を祠に祀り、沖縄本島とその周辺離島には50近くの祠がみられます。

宜野湾市内には、大謝名と字宜野湾の2ヶ所で土帝君が祀られており、旧暦2月2日の腰憩い（クシュクィー）には土帝君を拝みます。

腰憩いとは、田植を終えた後の慰労会であり、豊作を祈願する行事です。腰憩いには男性が参加し、戦前は宜野湾市内のほとんどの字で行われていました。その日は畑仕事も休みとなり、男性達は大きな家に集まり、豚肉料理を食べ、三味線を弾いて夜中まで歌い踊りながら休日を楽しみました。戦前、字宜野湾と大謝名では、腰憩いの日に字の役員の方々が土帝君を拝んで豊作を祈願しました。今年は旧暦2月2日にあたる3月1日に土帝君を拝みます。

大謝名の土帝君（現在の様子）

☆大謝名の土帝君

大謝名の土帝君はかつて、港田原(ナトゥラバル)（現在の大謝名団地隣の南建工業付近）の水田地帯にありましたが、戦後、埋立てによって公民館前に移動し、その後、現在地の公民館裏の「謝魂之搭」近くに安置してあります。大謝名の土帝君は字宜野湾とは異なり、石をご神体とし、祠に祀っています。

戦前の腰憩いについて、大謝名の獅子舞保存会会長の崎間さんからお話しを聞くと、大謝名では土帝君の祠の前に昔は牛を供えていたけれど、次第に牛から豚、その後は豚から鶏を供えるようになり、「供物がだんだんと小さくなっていったんだよ」とお話ししていました。現在では、牛や豚、鶏を供えることはなくなり、モリモチ（オモチ）と重箱料理や果物を祠の前に供え、獅子舞保存会のみなさんが拝みを行います。

☆字宜野湾の土帝君

字宜野湾の土帝君はかつて、男女2体の像をご神体として祠に祀っていましたが、1体（男性の像）を昭和はじめに失い、戦災によってもう1体（女性の像）もなくしました。そこで、1983（昭和 58）年に郷友会が新たなご神体を安置しようと、台湾で制作させた2体の像を 1984（昭和 59）年3月4日に祠に安置したのです。

字宜野湾の土帝君（ご神体となる男女の像）

戦前、腰憩いには鶏一羽にお肉やお豆腐などのご馳走に、ウチャナク（キナコをつけたオモチ）を祠の前に供えていましたが、現在は豚肉・ゴボウ・コンブ・カマボコ・天ぷら・オニギリといった盛りだくさんのご馳走を詰め込んだ重箱料理を供えます。拝みは郷友会の男性の方々が中心となり、自治会長さんも拝みに参加し、公民館から土帝君に向かって祈願をしています。

字宜野湾の腰憩いの様子（公民館から土帝君に向かって拝みを行っています）

☆人びととトゥーティークー

このように、腰憩いの拝みの様子は変化しているものの、戦前からの豊作祈願に加え、大謝名と字宜野湾では現在、区民の無病息災や健康祈願もしているそうです。この点について、大謝名の獅子舞保存会会長の崎間さんは、「時代に合わせてのものだからね」と、拝む内容も時代に合わせて変化しているのではないかと、お話ししていたことが印象に残りました。時代が移り変わり、農業中心の生活ではなくなりつつある現在でも、土帝君との関わりを大切にしているように感じます。

カー！　其ノ二　カーのタイプもあれこれ

前号では、湧き水の「カー」について大まかにお話しました。今回は、カーのかたちについてのお話です。

宜野湾市だけでなく、県内には多くのカーが分布しています。水はわたし達が生きていくには、欠かすことができません。その水を得るために人びとは、その土地の地形や土の様子をふまえて、いかに多くの水が確保できるかを考えてカーを作ったように思われます。

■樋口（ひぐち）のあるタイプ

土地の様子が崖や地層の境目で、水量が多い場合、水の出口に樋口（とい）をつけて水を得るタイプで、おもに方言で「ヒージャー」「ヒージャーガー」と呼びます。宜野湾市では「我如古ヒージャーガー」（写真右）、大山の「ヒージャーガー」、真志喜の「ムイヌカー（森川）」などがあります。

■湧き出るタイプ

湧き水が地下から湧き出る場合は、お風呂の浴槽のように水が貯められるようにしています。この場合、ヒージャーガーのような名称はなく、単に〇〇〇カーと呼ばれています。野嵩の「クシヌカー」「メーヌカー」（写真左）、愛知の「ヌールガー」、字宜野湾の「ウブガー」「インガー」、志真志の「ウブガー」などがあります。

■地下を掘るタイプ「チンガー」

カーの中には、地下を掘って水を得ることもあります。このタイプは「井戸」「チンガー」（写真右）と呼ばれます。先の２つのタイプが地域の人びと、みんなで使うのに対して、チンガーは個人の屋敷内に設けることが多く、家庭用の水道の始まりにあたります。井戸の入口に釣瓶（つるべ）を設けて水を得ます。

このようにみると、カーのタイプにもいろいろあり、人びとの生活との深い関わりを感じます。

行政資料にみる戦後の宜野湾 (8)

～役所移転の陳情書～

■戦後の村役所

戦前、字宜野湾にあった宜野湾村役場は、収容所があった関係からか、戦後、野嵩に置かれました。村民は野嵩や普天間といった村の一角にひしめき合いながら生活し、村政は野嵩を中心に営まれていました。しかし、やがて村民の大半が各字へ分散するようになると、役所の設置場所をめぐって問題が発生します。今回は「陳情書／1946年～1955年」をひも解いてみましょう。

■移転陳情

資料1は1949（昭和24）年11月14日付の陳情書です。この陳情書は、村の各字から選出された村会議員さんや各区長さんから、当時の宜野湾村長の桃原亀郎に、野嵩の村役所を愛知の宜野湾校付近に移転するよう提出されています。役所移転の理由として、「現在の宜野湾村役所は村の北のはずれにあるため、村の中南部の住民が不便しており、(野嵩は)村民を指導するにも不適当な場所」であることが挙げられています。

■“補助飛行場”

さらに、理由三には「飛行場ノ通行ガ許可サレタノデ大山地区住民デモ何等通行ニ支障ナシト認ム」とあります。戦後間もない頃の普天間飛行場には滑走路こそ確認できるものの、現在のようなフェンスはなく、“補助飛行場”、あるいは“予備飛行場”として、しばらくの間使用されていませんでした。この移転陳情の前提となっている「何等通行ニ支障ナシ」という住民の認識に、当時の普天間飛行場の様子の一端がうかがえます。結果的に、この陳情は村議会で否決され、役所は引き続き野嵩に置かれることになりました。

陳情書

現在ノ宜野湾村役所ハ村ノ北端ニ在リテ各区民ノ不便ヲ来ス次第ナル宜野湾校附近ノ適当ノ場所ニ移転セラレンコトヲ切望ス仍テ左記理由ニ依リ陳情致シマス

理由

一、現在ノ村役所ハ村ノ北端ニ在リテ適当ノ場所ニ非ラズ

二、南部中部住民ノ被ル労力ノ損失甚大ニシテ尚又村民指導ニ不適当ノ場所ナリト認ム

三、飛行場ノ通行ガ許可サレタノデ大山地区住民デモ何等通行ニ支障ナシト認ム

四、村役所ハ新建築セラレル様キニ移転スルハ最モ適当ノ時期ト認ム

一九四九年十一月十四日

宜野湾村字嘉数
議会議員 稲福仁
同 稲
同 稲
同 稲

季節を知らせるお客さま･･･♪♪

2 月のある日、文化課に珍客が訪れました。宜野湾市真志喜の森川公園で発見されたフクロウです。予期せぬお客さんで職員は驚いていましたが、運ばれてきた手の中で全く動かないフクロウを見て心配し、すぐに沖縄市にある沖縄こども未来ゾーン(沖縄こどもの国) に保護してもらいました。

お昼前の数分間の出来事でしたが、文化課に訪れたフクロウは“ アオバズク” という種類で、全長約 20 ㎝、黒いマスクをすっぽりかぶったようなフクロウでした。鳴き声は低い声で「ホウホウ」と鳴くそうで、方言では“ マヤージクク“ と呼ぶそうです。一年中宜野湾市で生活している留鳥と言われていますが、一説では春に南の地域から渡ってきて、秋に南に帰っていく夏鳥とも言われています。

アオバズク

それではこのアオバズク以外に、春の訪れとともに宜野湾市にやってくる夏鳥はどのような鳥がいるのでしょう。まず普天間飛行場周辺に渡来してくるアカショウビンや宇地泊でみられるコアジサシ、宜野湾市西海岸で餌を取っているベニアジサシという鳥たちをはじめ多くの夏鳥がいます。その他には鳴き声に特徴のあるサンコウチョウ、30 ㎝程の大きさのエリグロアジサシなども宜野湾市で見ることができます。

アカショウビン

コアジサシ

ベニアジサシ

しだいに暖かくなり春が近づく今日この頃。身の回りの草花や木々といった植物の変化から季節の変わり目を感じるだけでなく、このような春の訪れとともに宜野湾市にやってくる鳥たちから、春の足音を感じるのもいいかもしれませんね♪♪

今回ご紹介した宜野湾市の野鳥をはじめ、自然については
『ぎのわん自然ガイド』『自然とヒト』『宜野湾市史第９巻自然』
がオススメです！！

琉歌にみる桜

沖縄の緋寒桜は、本土のソメイヨシノより2ヶ月余りも早く、1月下旬から2月初旬にかけて満開の時期を迎えます。その名所といえば、本部町の八重岳、今帰仁城跡、名護城跡が特に有名でしょうか。わが宜野湾市では、嘉数高台公園の桜が見事です。

さて、琉歌には梅、桜、桃、百合、蘭などといった四季折々の花を詠んだ歌が多く、中でも桜を詠んだ歌は特に多くみられます。では、桜にちなんだ琉歌を一首紹介しましょう。

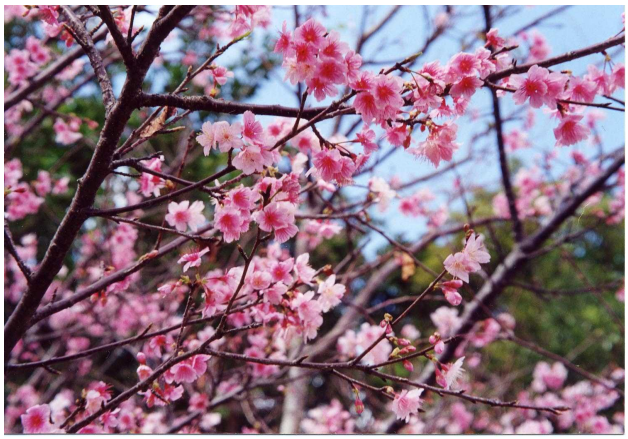
流れゆる水に　桜花うけて　色きよらさあてど　すくて見ちゃる

（山川の水に浮いて流れる桜の花があまりにも美しかったので、すくいあげてみた）

この歌は、琉歌の二大歌人の一人といわている吉屋チルー（＊）が上句を、吉屋の愛人であった首里の仲里里之子（さとぬし）が下句を歌い付けたといわれており、芝居などでもなじみが深く、歌そのものの美しさはいうまでもありませんが、吉屋と首里の里之子との恋睦まじい姿が読み取れる歌です。

＊　一口メモ

吉屋チルー…1650 年？～1668 年？古くは＜よしや＞。８歳の時に遊郭に売られ、18 歳で死を遂げる。数々の秀歌を残し、恩納ナベと並び称される女流歌人。



春を告げる桜の花（嘉数高台公園）

好評発売中！！

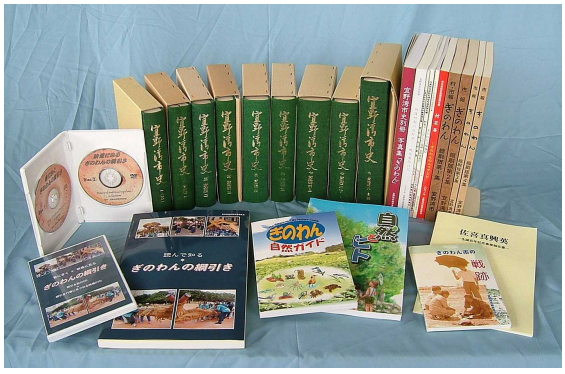
ぎのわんの綱引き

　みなさん、突然ですがここでクイズです☆戦前、宜野湾では何ヵ字で綱引きが行われていたか、ご存知ですか？
　答えは、14 ヶ字です。「14 ヶ字もあったの！？」と驚かれたみなさん、オススメの本とＣＤ＋ＤＶＤが出ました！！

☆ 読んで知りたくなった人にはこれ！！
『読んで知る＊ぎのわんの綱引き』
〈報告書〉1,500 円（税込み）
　戦前行われていた市内 14 ヶ字の綱引き行事を聞き取り調査によって掘り起こし、さらに現在行われている大山・真志喜・野嵩・我如古での綱引き行事および関連行事の様子をまとめた報告書です。

☆ 音楽や映像で知りたくなった人にはこちら！！
『音に聞く＊映像にみる　ぎのわんの綱引き』
〈CD＋DVD〉2,000 円（税込み）
　綱引き行事で歌われた「掛け歌」「人集めの呼び込み歌」「ハヤシ」などを収録したＣＤと、綱引きの歴史、現在の綱引き、綱引き行事にまつわる写真･映像資料をまとめたＤＶＤのセットです。
　綱引きの時期までは、報告書、ＣＤ・ＤＶＤで楽しんでみてはいいかがでしょうか？

アギエーの様子（大山）



　この他にも市史１～９巻・写真集など、宜野湾市の歴史・文化・自然に関する本がまだまだありますので、ぜひ、ご覧になってください。
　お求めの方は、宜野湾市教育委員会文化課（宜野湾市民会館内）と宜野湾市立博物館（森川公園隣）にて、販売しております。詳しくは、宜野湾市教育委員会文化課市史編集係
TEL (098)893-4431
FAX (098)893-4434